

朝来市山東町

方 谷 古 墳 群

—一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅱ)建設に伴う発掘調査報告書—

平成20(2008)年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

朝来市山東町

方 谷 古 墳 群

—一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅱ)建設に伴う発掘調査報告書—

平成 20 (2008) 年 3 月

兵庫県教育委員会



方谷古墳群遠景（東から）



方谷古墳群近景（北から）



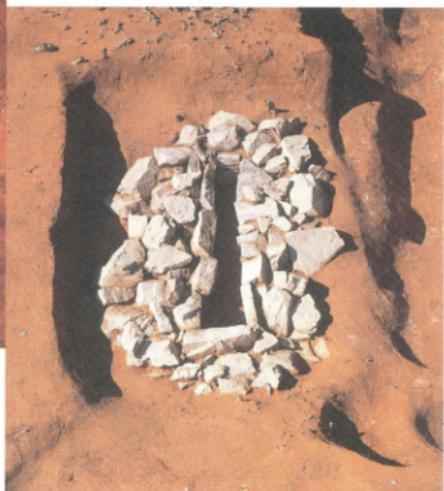
4号墳（東から）



4号墳出土遺物



5号墳第2主体部（南東から）



5号墳第2主体部石棺検出状況（南東から）

例　　言

1. 本書は兵庫県朝来市山東町字方谷に所在する方谷古墳群の発掘調査報告書である。兵庫県文化財調査報告の第330冊にある。
2. 発掘調査は一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路II）建設に伴うものである。建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 発掘調査は、平成14年度に兵庫県教育委員会が実施し、同埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部）藤田淳・小川弦太が担当した。
4. 遺構の実測は、調査員と調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部）嘱託員が行った。
5. 写真は遺構を調査員が撮影し、遺物については株式会社タニグチフォトに委託した。
6. 本書の挿図第2図「周辺主要遺跡」は、国土地理院発行の1/25,000「矢名瀬」を1/50,000に縮小して使用した。
7. 本書で使用した標高は東京湾平均水準(T.P.)を基とし、方位は国土座標第V系の座標北を示す。座標値については世界測地系である。
8. 本書の執筆は小川が行い、編集は嘱託職員村上京子・池内くみ・長演重美の協力を得て小川が行った。
9. 調査で出土した遺物・写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水630-1）において保管している。
10. 現地調査の際には、朝来市教育委員会の田畠基氏・中島雄二氏からご指導、ご協力をいただいた。

凡　　例

1. 遺物は種類ごとに通し番号をついているが、鉄器にはMを冠し、土器との区別を行っている。
2. 土器は種別によって断面の表現を変え、須恵器は黒塗り、土師器は白抜きで示している。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境.....	1
第1節 地理的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	2
第2章 調査の経緯.....	4
第1節 調査に至る経緯.....	4
第2節 調査体制.....	4
第3章 調査の結果.....	7
第1節 古墳群の概要.....	7
第2節 1号墳.....	7
第3節 2号墳.....	11
第4節 3号墳.....	13
第5節 4号墳.....	15
第6節 5号墳.....	21
第7節 土坑.....	26
第4章 総括.....	29

挿図目次

第1図 遺跡の位置.....	1	第16図 4号墳出土土器.....	17
第2図 周辺の遺跡.....	3	第17図 4号墳第1主体部.....	18
第3図 調査前地形測量図.....	5	第18図 第1主体部出土鉄器.....	19
第4図 方谷古墳群全体図.....	6	第19図 第1主体部出土土器.....	19
第5図 1号墳平面・断面.....	8	第20図 4号墳第2主体部.....	20
第6図 1号墳第1主体部.....	9	第21図 5号墳平面・断面・溝断面.....	21
第7図 1号墳第2主体部.....	10	第22図 5号墳出土鉄器.....	22
第8図 2号墳出土遺物.....	11	第23図 5号墳第1主体部.....	23
第9図 2号墳平面・断面・主体部.....	12	第24図 5号墳第2主体部.....	24,25
第10図 3号墳主体部.....	13	第25図 SK1・SK2.....	26
第11図 3号墳平面・断面.....	14	第26図 SK3.....	27
第12図 (8)内部の布目状痕跡.....	15	第27図 SK4・SK5.....	27
第13図 3号墳出土土器.....	15	第28図 SK6.....	28
第14図 4号墳平面・断面.....	16	第29図 土坑出土遺物.....	28
第15図 4号墳墳丘断面.....	17		

写真図版目次

卷頭図版 1 方谷古墳群遠景・方谷古墳群近景
卷頭図版 2 4号墳・4号墳出土遺物・5号墳第2主体部・5号墳第2主体部石棺検出状況

写真図版 1	古墳群調査前全景	写真図版 7	5号墳
	古墳群調査後全景		古墳調査前全景
写真図版 2	1号墳		古墳全景
	古墳群調査前近景		墳頂部全景
	古墳全景	写真図版 8	5号墳
	第2主体部		第1主体部、第2主体部近景
写真図版 3	2号墳		第1主体部鉄器出土状況
	古墳全景		第1主体部全景
	主体部	写真図版 9	5号墳第2主体部
	貼り石		主体部検出状況
写真図版 4	3号墳		蓋石検出状況
	古墳全景		蓋石除去状況
	主体部		石棺検出状況
	主体部遺物出土状況	写真図版 10	土坑
写真図版 5	4号墳		S K 1
	古墳調査前全景		S K 2
	古墳全景		S K 3
	第1主体部		S K 4
写真図版 6	4号墳		S K 5
	第1主体部遺物出土状況		S K 6
	第1主体部高坏出土状況	写真図版 11	2号墳・3号墳出土遺物
	第1主体部須恵器坏出土状況	写真図版 12	4号墳出土遺物
	第1主体部刀子出土状況	写真図版 13	4号墳・5号墳・S K 1出土遺物
	第2主体部		
	周溝断面、遺物出土状況		

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

方谷古墳群が立地する朝来市山東町は古代律令制下では但馬国朝来郡に属し、現在は兵庫県の北東部、京都府と接する山間の地にある。

朝来市山東町は面積49.16km²、人口6,318人(2004年)。合併前の朝来郡4町では和田山町、朝来町に統いて3番目に人口の多い地域となる。2005年4月、和田山町、朝来町、生野町、山東町の朝来郡4町が合併し朝来市となる。合併後の朝来市は総面積402.98km²、人口34,791人(2005年)。

方谷古墳群は山東町東部に位置し、東2kmには但馬と丹波の旧国境となる遠坂峠、南約3.5kmには標高962mの栗鹿山、北西3.5kmにはJR山陰本線の矢名瀬駅がある。遺跡の南には柴川が西流し、山東町内において与布土川と合流する。与布土川は和田山町内で円山川となり、北流し日本海へと通じる。

遺跡が立地するのは兵庫県と京都府の府県境となる山地である。この山地は標高250m~500m程度の山々からなり、そこから南側へ派生した幾本もの尾根のひとつに古墳群は築かれている。この場所は、与布土川とその支流によって形成された山東盆地の東端にあたり、古墳群の西側には山東盆地が一望できる。山陰道が通るこの地は但馬への出入口となる場所であり、古来より交通の要衝であった。



第1図 遺跡の位置

<参考文献>

- 『角川日本地名大辞典28兵庫県』 角川書店 1987
『日本歴史地名大系第二九巻I 兵庫県の地名』 平凡社 1999
朝来市ホームページ <http://www.city.asago.hyogo.jp> 2007

第2節 歴史的環境

方谷古墳群のある朝来市山東町は、平野部においては弥生時代中期から集落が営まれ、丘陵尾根上や谷などに数多くの古墳が築かれた地域である。古代には町内を山陰道が通過し、栗鹿駅家が設置される。また、その近くには式内社栗鹿神社が鎮座する。中世には、羽柴秀吉の但馬攻めの際に、山陰道への押さえとして若水城(19)が築かれるなど、交通の要衝としての性格が色濃く遺跡に現れる。

山東町内では旧石器および縄文時代の遺跡はほとんど発見されていない。発掘調査においては、柿坪遺跡(7)、栗鹿遺跡(21)から縄文時代後期～晩期の土器・石器の出土例が知られる。

弥生時代は中期以降、柿坪遺跡(7)、仲田遺跡(5)が知られている。柿坪遺跡は引き続き古墳時代へ続く集落であるが、仲田遺跡は弥生時代中期後半に限られる遺跡である。また、今回の高速道路建設に伴って発掘調査が行われた芝ヶ峰遺跡(11)では弥生時代中期末の堅穴住居跡3棟と墓、栗鹿遺跡(21)では堅穴住居跡約30棟、方形貼石墓などが新たに見つかっている。

弥生時代後期では森向山遺跡、五反田遺跡が知られる。森向山遺跡は山東盆地南部の与布土川左岸に位置する遺跡である。和田山町へ抜ける東西の谷の入り口にあたり、堅穴住居跡などが発見されている。五反田遺跡は、越田から栗鹿へと抜ける小さな谷の西側斜面に位置する。これら集落を望む丘陵尾根上には墳墓群がある。柿坪中山古墳群(8)の弥生墳墓は、柿坪遺跡の南に位置する独立丘陵上に築かれた墳墓群である。芝花古墳群(12)は柿坪古墳群の東にある丘陵北側斜面に位置する。古墳群と同じ尾根稜線上から21基の弥生時代後期の墳墓群が検出された。

古墳時代になると、集落遺跡では柿坪遺跡(7)、栗鹿遺跡(21)が知られる。柿坪遺跡は山東町だけでなく、和田山町などを含めた南但馬の中心集落として存在する。平成11年度に行われた発掘調査では、古墳時代全般にわたる堅穴住居跡約120棟や掘立柱建物跡34棟、古墳時代中期の「鍛入母屋造り」の大型掘立柱建物(床面積201m²)を中心とした建物群などが検出された。これらは豪族や首長の居館、さらには祭祀場としての性格が考えられるものである。山東町東部、栗鹿神社の北側に位置する栗鹿遺跡では、古墳時代初頭から飛鳥時代におよぶ堅穴住居跡が検出されている。造り付けの甕を有するものが多く、その導入時期は須恵器導入とほぼ同じ時期であることが判明している。

山東町域の古墳は、兵庫県遺跡地図によると650基を超える登録がされている。それらの多くは群集墳であり、盆地を望む丘陵上に多く築かれている。また、これまで前方後円墳などの首長墓は発見されていなかったが、平成13年度に行われた若水古墳(18)の調査によって、この古墳が長径40m、短径35mを測る楕円形の墳丘を造り出した古墳時代初期の王墓であることが判明した。2つある主体部の1つからは、飛禽鏡、内行花文鏡などが出土し、和田山町域の山古墳に先行する古墳と考えられる。それまで不明であった南但馬における古墳時代初期段階の首長系譜を考える上で重要な発見となった。

山東町内の古墳は、6世紀前半までの堅穴系を埋葬主体とする初期群集墳と6世紀後半以降の横穴式石室を埋葬主体とする後期群集墳に大きく分けられる。前者は、山東町中央部に存在する盆地あるいは小河川によって形成された各谷を見下ろすことができる尾根上に立地する特徴があり、柿坪中山古墳群(8)や若水古墳群(18)などがあげられる。後者は、各河川上流部の山麓あるいは谷部に立地する特徴があり、西谷古墳群(22)、追間古墳群があげられる。なかでも、柿坪中山古墳群は柿坪遺跡の南に位置し、4世紀後半から5世紀中頃の山東町を代表する古墳群である。2号墳、1A号墳、3号墳、4号墳からは方谷古墳群5号墳と同じ小堅穴式石室が見つかっている。

歴史時代になると、柴遺跡(26)、方谷遺跡(27)、栗庭遺跡(21)、若水城跡(19)など今回の道路建設に伴い調査が行われ、新たな所見を得られた遺跡が多い。柴遺跡は方谷古墳群に隣接する遺跡であり、「驛子」と書かれた木簡が出土した。山東町柴は栗庭駅家の推定地のひとつであることから、この木簡の出土意義は大きい。方谷遺跡は、方谷古墳群の東の谷、柴遺跡の北に位置し、律令期の須恵器・土師器などが出土している。栗庭遺跡では、中世の栗庭神社への参道である石敷きの道路遺構が検出された。若水城跡では、石積み虎口や主郭を取り囲む横掘が見つかり、「織豊系城郭」としての特徴が認められた。但馬攻めの際に羽柴秀吉が築いた陣城のひとつと考えられている。

＜参考文献＞

- 山東町教育委員会 『持谷古墳発掘調査報告書』 1988年
- 兵庫県教育委員会 『平成11年度 年報』 2001年
- 兵庫県教育委員会 『平成12年度 年報』 2002年
- 兵庫県教育委員会 『平成14年度 年報』 2004年
- 兵庫県教育委員会 『兵庫県遺跡地図』 2004年
- 兵庫県教育委員会 『加都遺跡Ⅰ』 2005年
- 兵庫県教育委員会 『加都遺跡Ⅱ』 2007年
- 兵庫県教育委員会 『但馬の王墓 茶すり山古墳調査概報』 2003年 学生社



1 大師山古墳群	7 純坪遺跡	13 純坪向山古墳群	19 若水城跡	25 方谷古墳群
2 城ノ越古墳群	8 純坪中山古墳群	14 那場古墳群	20 若水古墳群	26 柴遺跡
3 今山古墳群	9 越坪山古墳群	15 和賀向山古墳群	21 栗庭遺跡	27 万谷遺跡
4 宮ノ谷古墳群	10 越田四辻遺跡	16 切ノ山古墳群	22 西谷古墳群	28 波城跡
5 伊田遺跡	11 ケダ遺跡	17 沢谷古墳	23 人向寺古墳群	29 施ノ口北古墳群
6 水池遺跡	12 芝花古墳群	18 若水古墳・若水古墳群	24 大原1号墳・2号墳	30 梶ノ口古墳群

第2図 周辺の遺跡 (S=1 : 50,000)

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

建設省(現：国土交通省)は広域交通ネットワークの形成によって、産業・経済を発展させ、地域利便性の向上を目指して北近畿豊岡自動車道(起点：兵庫県豊岡市、終点：兵庫県丹波市春日町)の建設を計画した。一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱは、北近畿豊岡自動車道の一端を形成する、朝来市山東町遠阪岬から朝来市和田山町和田山JCTを結ぶ高規格幹線道路である。

兵庫県教育委員会では、上記計画路線内の分布調査を平成5年に行い遺物散布地を発見、周知した。その中でNo.104地点に周知の埋蔵文化財包蔵地であった「方谷古墳群」を発見した。分布調査の結果を受け、道路建設によって遺跡の現状が改変される箇所を中心に、平成12年度に確認調査を行い事業予定地内に5基以上の古墳が存在することを確認した。

以上の結果を受けて、平成13年度に方谷古墳群の本発掘調査が行われた。

第2節 調査体制

調査は平成5年の分布調査に始まった。本節では分布調査の結果を受けて実施された平成12年度の確認調査と平成13年度の本発掘調査および平成17年度からの整理作業について概要を述べる。

確認調査

遺跡調査番号 2000203

調査担当者 種庭 淳介・大崎 晃司・池田 征弘

調査期間 平成12年7月10日～平成12年7月28日

調査面積 194m²

No.104地点として周知された範囲に合計20箇所のトレンチを設定し調査を行った。その結果、丘陵尾根のトレンチで石棺、木棺、周溝を確認した。さらに古墳に伴う須恵器、土師器が出土した。

本発掘調査

遺跡調査番号 2001195

調査担当者 藤田 淳・小川 弦太

調査期間 平成13年12月11日～平成14年3月15日

調査面積 1,791m²

本発掘調査実施前に、重機が木材伐採や運搬のために尾根上へ進入していた。そのため、尾根上には4号墳の北側まで重機の跡が残り、部分的に表土が削られていた。

調査区内の木材伐採を行った後、調査前の空中写真測量を行い、地形の把握を行った。発掘調査は、古墳の推定位置を中心にして、尾根上に土層観察のための土手を廻し、人力で掘削を行った。5号墳では石材が散乱していたため調査前に電気探査を行った。その結果、広範囲に石材の分布が確認されたため、石室が築かれていることが予想された。

調査は、5号墳から行い、4、3、2、1号墳と進めた。5号墳は石室の実測のため、他の古墳と調

査は並行して行った。5号墳第1主体部では、横断面に杭状の痕跡が確認されたため、土層のはぎ取りを行った。

整理体制

出土遺物の洗浄、ネーミングなどは現場事務所で実施し、報告書作製に伴う本格的な整理作業(遺物実測、復元、トレース、図版作製など)は兵庫県立考古博物館荒田分室(旧:兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所)および、兵庫県立考古博物館で実施した。

平成18年度

遺物の実測・復元を行った。

整理保存班 岸本 一宏・岡本 一秀

嘱託員 実測: 村上 京子・溝上 くみ

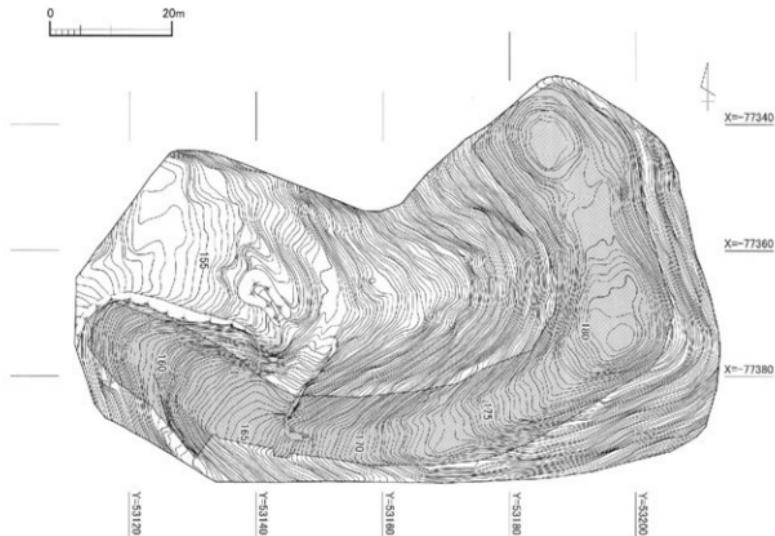
復元: 早川亜紀子・伊藤 ミネ子・家光 和子・三好 錠子・奥野 政子

平成19年度

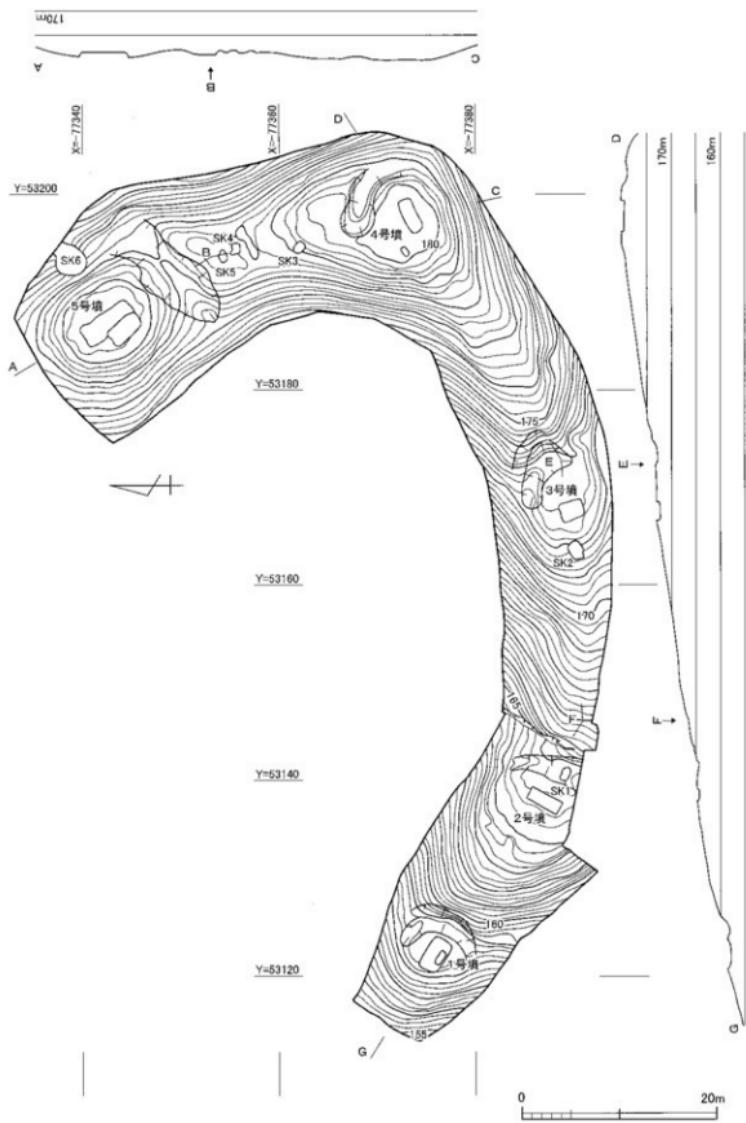
トレース、造構、遺物図版作製、遺物写真撮影、写真図版作製などの報告書編集作業を行った。

整理保存班 岸本 一宏・岡本 一秀

嘱託員 村上 京子・池内 くみ・長濱 重美



第3図 調査前地形測量図



第4図 方谷古墳群全体図

第3章 調査の結果

第1節 古墳群の概要

方谷古墳群は山東町の東端、柴集落の北側にある西向きの尾根上に位置する。古墳群は、昭和60年代にはその存在が知られ⁽¹⁾、1999年発行の山東町遺跡分布図には尾根の下方側から1号墳、2号墳、…、8号墳と記されている。分布調査にてこれらに該当する地形の高まりや平坦面を確認している。確認調査では今回の調査範囲内には5基以上の古墳が存在するとされたが、本発掘調査の結果、5基であることが判明した。今回調査した5号墳の背後の尾根上にはさらに3基の古墳が存在する。

5基ある古墳のうち、1号墳～4号墳は墳丘背後の尾根に弧状の区画溝を巡らせ、盛土によって墳丘を形成する古墳である。これに対して5号墳は尾根を横切る直線的な区画溝を掘り、地山成形によって墳丘を形成する。古墳の主体部においては、1～4号墳は木棺直葬を主とし、5号墳は木棺直葬と小型竪穴式石室を持つ。古墳の時期は、3号墳、4号墳からは陶邑編年⁽²⁾のTK10型式に併行する須恵器が出土している。5号墳では直接的に時期を特定できる遺物は出土していないが、主体部の形状などから4世紀末から5世紀前半ごろの古墳と考えられる。1号墳、2号墳は墳丘の築造方法から3号墳、4号墳に近い時期であろう。

このように、1～4号墳と5号墳の間には、墳丘の成形方法・形態・埋葬施設、時期などに明瞭な違いがある。同一尾根上の古墳群ではあるが、古墳の築造時期は大きく2時期に分けられる。

古墳以外の遺構としては、落とし穴と考えられるものを含む土坑を6基検出した。

[註]

(1) 山東町教育委員会『持谷古墳発掘調査報告書』1988

5頁、第2図山東町の主要遺跡において、方谷古墳群一帯を古墳群として図っている。

(2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

第2節 1号墳

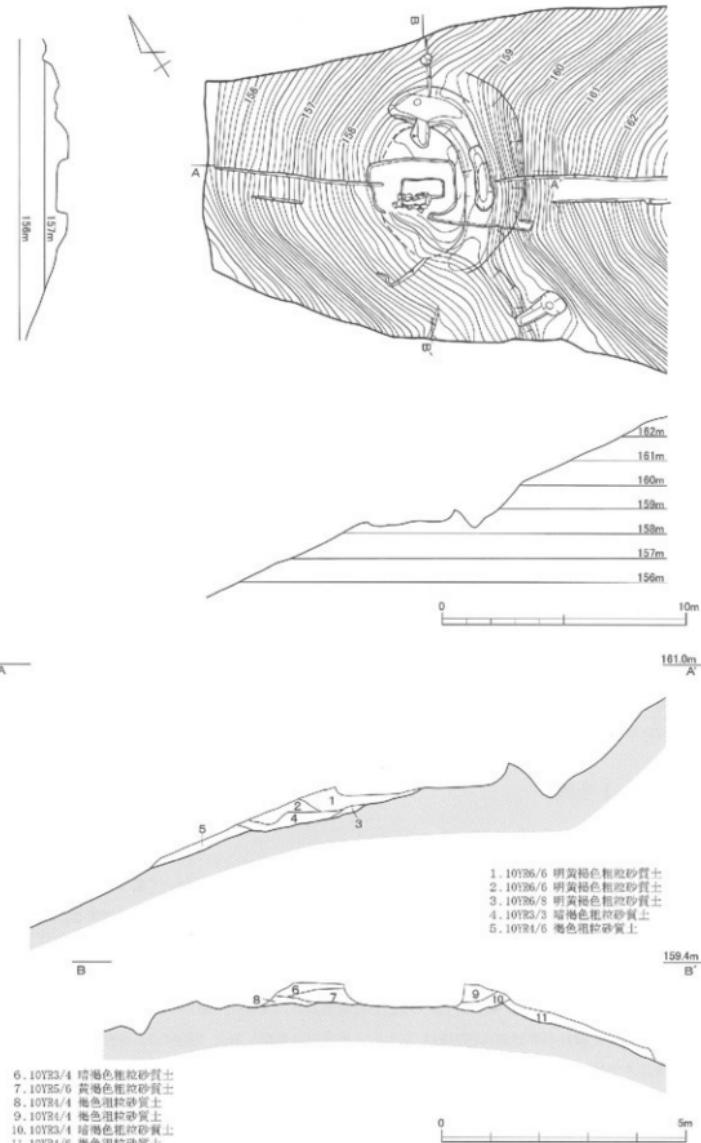
1. 墳丘(第5図、写真図版2)

検出状況 尾根斜面の最も下に位置し、標高は159mである。確認調査において第2主体部の右棺が検出されていた。墳丘中央に第1主体部を検出し、少し南西にずれて第2主体部が位置する。尾根から削り出した平坦面に盛土することによって墳丘を構築している。

区画溝 墳丘背後に、斜面を大きく削った弧状の溝を掘り区画している。溝は墳丘の山側半分近くまで巡る。墳丘背後の最も広い幅は2.7m、検出した墳頂面との高低差は最大60cmを測る。

規模 検出した墳丘の平坦面は楕円形を呈する。平坦面は長径5.3m、短径3.5mを測る。墳丘の裾は区画溝以外では明確ではない。

埋葬施設 墳頂部で2基の埋葬施設を検出した。第1主体部は木棺、第2主体部は石棺を埋葬施設とする。これら主体部の主軸は、尾根の主軸に平行している。第1主体部と第2主体部には切り合い關係があり、第2主体部のほうが新しい。



第5図 1号墳平面・断面

出土遺物 墳丘上、盛土内などから遺物の出土はない。

時期 墳丘の形態や他の古墳との関係から、6世紀代と考えられる。

2. 第1主体部(第6図、写真図版2)

検出状況 墳頂部中央で検出した。

第2主体部とは切り合い関係にあり、第2主体部に切られている。このため、墓壙と木棺の一部が破壊されている。さらに、墓壙は盛り土の流出によつて西側部分が崩れている。

墓壙 平面形は満丸の長方形を呈し、主軸方向は尾根の主軸と平行する。

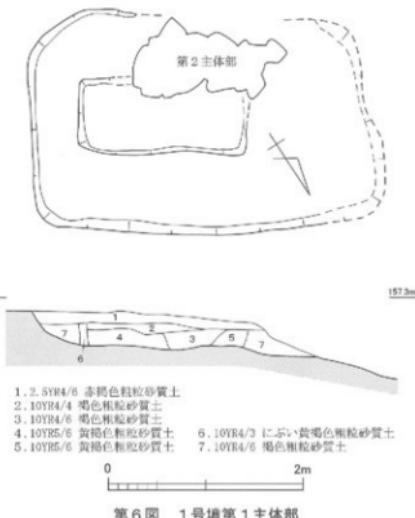
検出した規模は、主軸方向で3.52m、その直交方向で2.24m、深さ34cmを測る。墓壙の底はほぼ平坦である。

木棺 検出した木棺は長さ1.72m、幅78cm、棺中央部で深さ24cmを測る。

主軸方向の断面観察から厚さ8cmほどの棺材の痕跡が確認できた。棺の内法は、これら棺材の厚みを引いて、長さ1.56m、幅62cm程度であったと考えられる。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。

出土遺物 棺内および墓壙内から遺物の出土はない。

時期 年代は不明である。



第6図 1号墳第1主体部

3. 第2主体部(第7図、写真図版2)

検出状況 墳頂部中央で検出した。第1主体部とは切り合い関係にあり、第1主体部を切っている。石棺の一部は調査前に露呈していた。

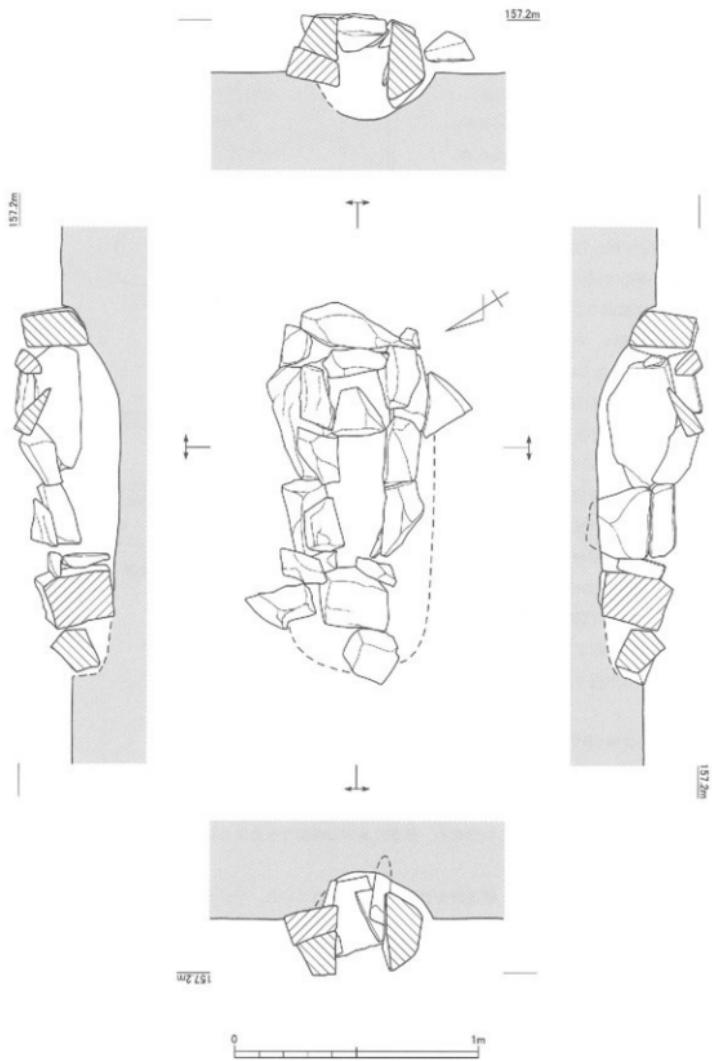
墓壙 検出時に石棺が露呈していたため、墓壙の範囲は確認できなかった。石棺が取まる程度の墓壙であったと考えられる。

石棺 組合式箱式石棺である。検出時すでに蓋石は失われていた。小口石底部における主軸方向の長さは92cmを測り、崩壊による影響が少ないと考えられる東小口の幅は20cmである。

長側石は両側とも2石からなり、部分的に2段に積まれる。小口石は両側とも1石からなる。墳丘の崩壊により石棺も西側に崩れ石材間の隙間が目立つ。

出土遺物 棺内から遺物の出土はない。

時期 年代は不明である。



第7図 1号墳第2主体部

第3節 2号墳

1. 墳丘(第9図、写真図版3)

検出状況 1号墳の南東側、3号墳より西方向へ伸びる尾根が、北西方向へと向きを変える標高164.5mの地点に位置する。調査前において広い平坦面を確認できた場所である。すでに盛土が流出していたため、現表土を除去した時点で主体部の棺底がわずかに残っている状況であった。尾根から削り出した平坦面に盛土することによって墳丘を構築している。

区画溝 墳丘背後の尾根を切るように、弧状の溝を掘り墳丘を区画している。溝は検出した平坦面から10cmほどの深さであり、深く地山を掘り込んでいない。平坦面を確保するために尾根を削り出したためと考えられ、区画溝は墳丘背後のみである。溝が埋設した後にはSK01が掘られている。

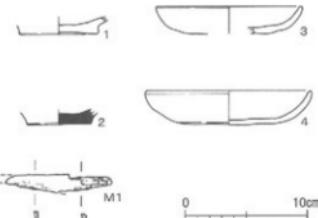
規模 検出した墳丘の平坦面は椭円形を呈す。盛土の流出が激しく、明確な規模は不明である。検出した平坦面は、長径9.25m、短径9mを測る。平坦面は9m前後の円形をしていたと考えられる。この範囲に盛土がなされていたとすると、今回検出した古墳の墳丘規模では最大となる。

貼り石 墳丘西側で、大きさが20cm~40cm前後の自然石8石が並んでいるのを検出した。これらは墳丘側に並べられていた可能性が考えられる。

埋葬施設 墳丘中央から区画溝側に近い位置に木棺1基を検出した。主体部の主軸方向は、尾根の主軸に直交する。

出土遺物 (第8図、写真図版11) 区画溝埋土上
面から黒色土器(1)、須恵器輪(2)、土師器皿(3)、
(4)が出土した。黒色土器(1)は、底部を回転糸
切り後ナデで仕上げる。須恵器輪(2)は、底部を
回転糸切り後ナデで仕上げる。土師器皿(3)、(4)
はいざれも手づくりねで成形後ナデで仕上げる。(4)
は口縁端部外面に強い横ナデを施し、口縁端部が
内傾する。

時期 出土遺物や墳丘の形態、他の古墳との関係
から、6世紀中頃と考えられる。



第8図 2号墳出土遺物

2. 主体部(第9図、写真図版3)

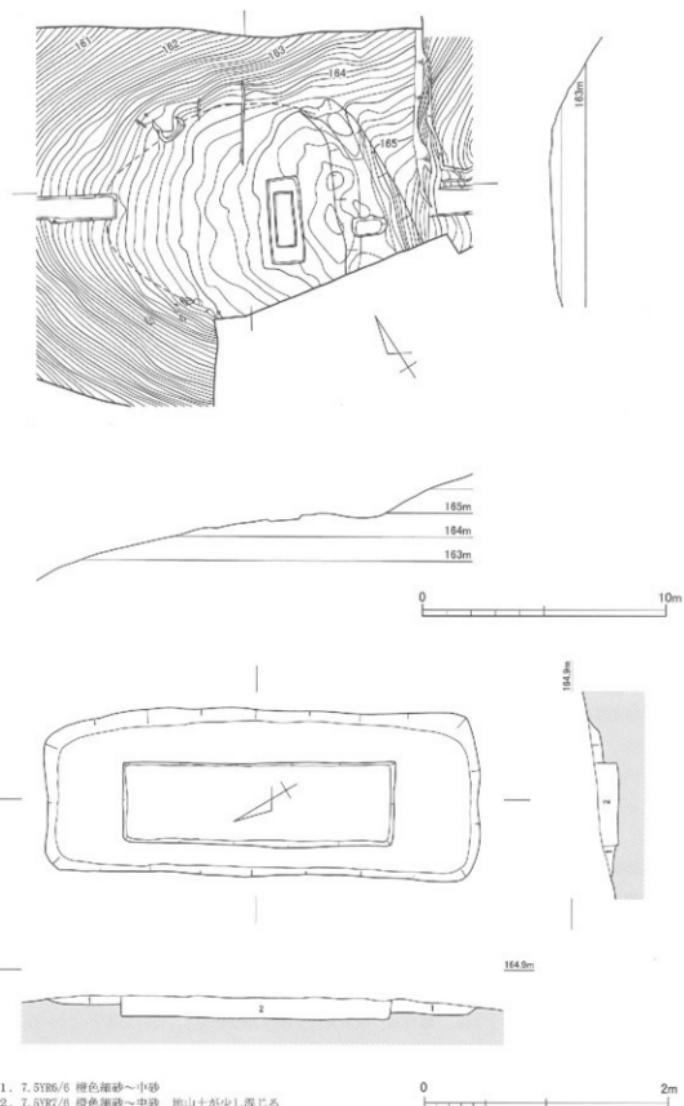
検出状況 表土を除去した時点で、主体部の平面形を検出した。墳丘盛土の流出、削平により、主体部はわずかに残存していたにすぎない。

墓壙 平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向は尾根の主軸と直交する。検出した規模は、主軸方向で3.53m、その直交方向で1.38m、深さ24cmを測る。墓壙の底は棺部分が一段下がっている。

木棺 検出した木棺は長さ2.23m、幅75cm、棺中央部で深さ16cmを測る。棺材は遺存していなかった。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。

出土遺物 (第8図、写真図版11) 墓壙埋土中から刀子(M1)が出土した。刀身の一部が欠損している。
間は両闘であるが、研ぎ減りにより刃側の闘が欠損する。茎には木質が残っている。

時期 6世紀代と考えられる。



第9図 2号墳平面・断面・主体部

第4節 3号墳

1. 墳丘(第11図、写真図版4)

検出状況 2号墳の東側、4号墳より南西方向へ伸びる尾根が西方向へと向きを変える標高172.8mの地点に位置する。調査前において平坦面が確認できた場所である。尾根から削り出した平坦面に盛土することによって墳丘を構築している。

区画溝 墳丘背後に弧状の溝を掘り区画している。溝は墳丘背後の北西部分のみで、南側には伸びない。そのため墳丘はいびつな形となる。溝は、墳丘背後で最大幅3.4m、検出面からの深さ30cmを測る。

規模 検出した墳丘の平坦面はいびつな楕円形を呈す。尾根の主軸方向に7m、その直交方向に4.75mの幅を測る。盛土の流出が激しく、はっきりとした規模は不明である。

埋葬施設 墳丘中央より少し下方側に寄った位置に木棺1基を検出した。主体部の主軸方向は、尾根の主軸に直交する。

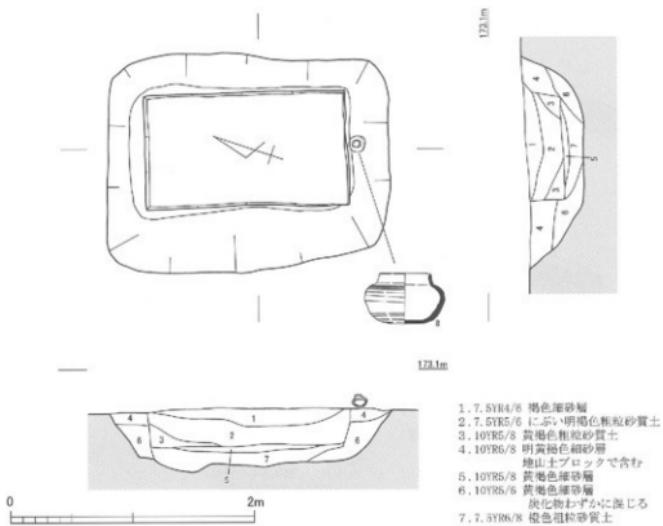
出土遺物(第13図、写真図版11) 区画溝上部から須恵器壺B(9)が出土した。(9)は、体部を直線的にのばし、口縁部がごくわずかに外反する。調整は回転ナデ。

時期 主体部出土の土器から判断して、6世紀中頃と考えられる。

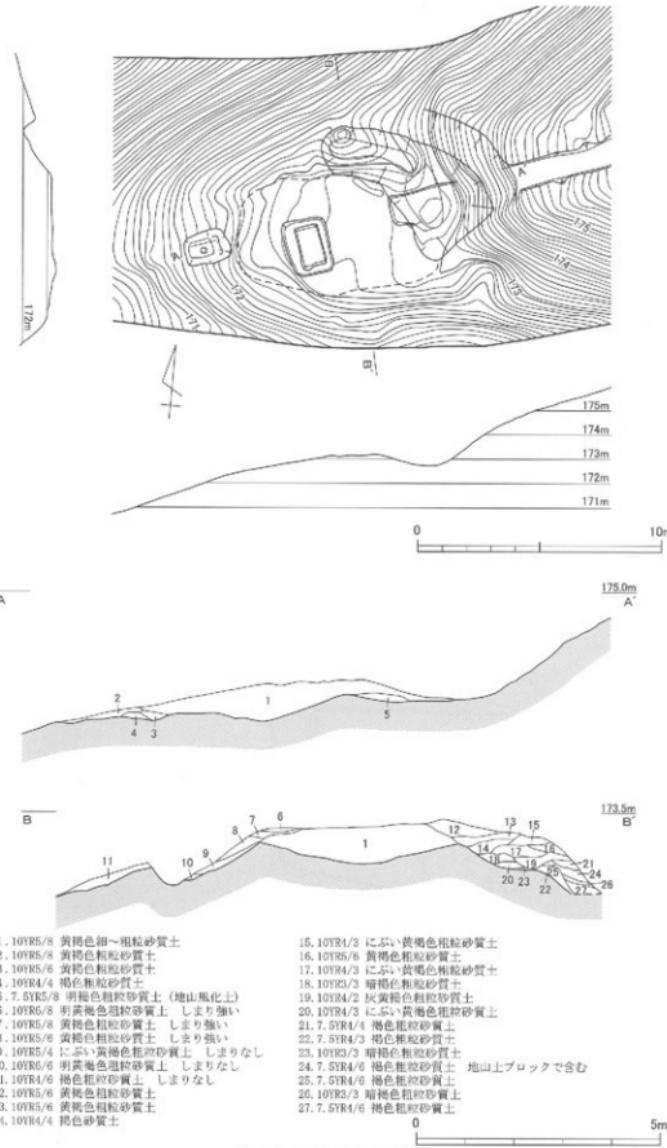
2. 主体部(第10図、写真図版4)

検出状況 表土を除去した時点での、主体部の平面形を検出した。

墓壙 平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向は尾根の主軸と直交する。検出した規模は、主軸方向で2.28m、その直交方向で1.79m、深さ42cmを測る。棺底と墓壙底の高さが一致しないため棺設置前に整



第10図 3号墳主体部



第11図 3号墳平面・断面

地が行われたと考えられる。

木棺 検出した木棺は長さ1.65m、幅93cm、深さ30cmを測る。棺材は遺存していないかった。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。

出土遺物 (第12・13図、写真図版11) 墓壙上から須恵器坏蓋(5)、坏身(6)、(7)、短頸壺(8)が出土した。須恵器坏蓋(5)は、天井部外面に回転ヘラ削りを行い、肩部に回線を施す。口縁端部はわずかに外に傾き、内面に段を持つ。須恵器坏身(6)、(7)は底部に回転ヘラ削りを行う。

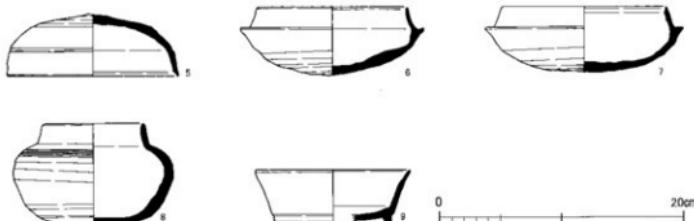
(6)は口縁端部を丸く收めるが、(7)は内側に段を持つ。短頸壺(8)は、底部に回転ヘラ削りを行い、体部は横ナデ

の後、肩部にカキ目を施す。底部内面に粗い布目状の痕跡がある。

時期 出土土器から判断して6世紀中頃と考えられる。



第12図 (8) 内部の布目状痕跡



第13図 3号墳出土土器

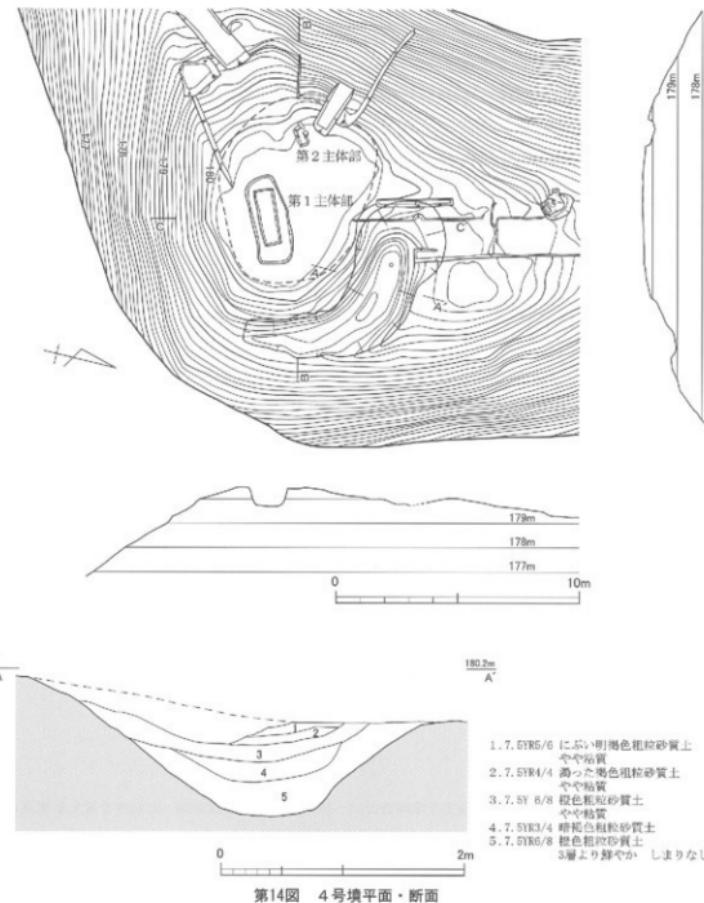
第5節 4号墳

1. 墳丘(第14・15図、写真図版5)

検出状況 3号墳の北東側、5号墳より南南西方向へ伸びる尾根が南西方向へと向きを変える標高180mの地点に位置する。今回調査した尾根では最も高い場所となる。調査前から墳丘の高まりが確認でき、第2主体部の石棺が露呈していた地点である。墳丘は自然地形を利用し、区画溝と平坦面を削り出した後に盛土を行って構築している。今回調査した墳丘では盛土の残りが良い古墳であり、その厚さは墳頂部で20~50cmを測る。墳丘の北側、区画溝先端付近から須恵器坏蓋、坏身が出土した。須恵器は盛土が流出したため区画溝内に移動したと考えられる。

区画溝 墳丘の北から東へ幅3.4m、深さ最大80cmの区画溝が掘られている。溝は、北側部分が最も深く、東に行くに従い浅くなる。墳丘の南側は急斜面となっており、おそらく斜面の崩落があったと考えられ、明確な構や墳丘の裾は確認できない。墳丘の南西側、3号墳へと伸びる尾根上に区画溝はない。溝の埋土4層から須恵器坏蓋(12)、坏身(13)が離れた位置で出土している。

規模 墳丘は区画溝によって円形に近い形となっている。墳丘の裾が明確なのは、区画溝の部分だけであり、それ以外においては断面で確認した盛土の範囲が墳丘と考えられる。しかし、墳丘盛土が流

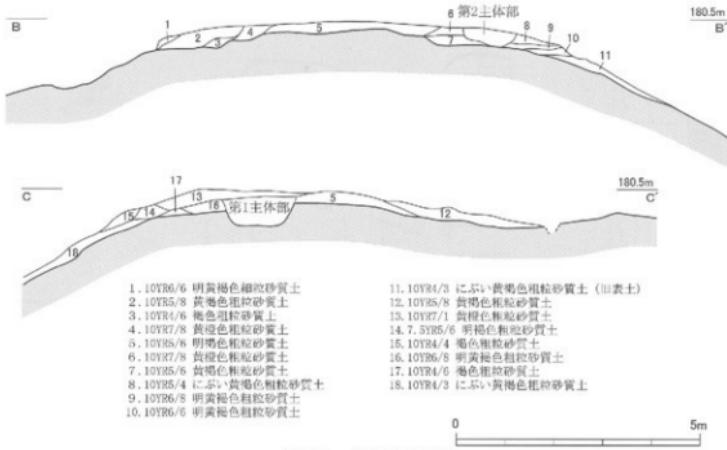


第14図 4号墳平面・断面

出しているため、明確な範囲は不明である。墳丘の裾が明確な東側の区画溝から第1主体部の主軸方向で最大8.7m、それに直交する方向で最大7.2mを測る。

埋葬施設 平坦面で2基の埋葬施設を検出した。第1主体部は木棺、第2主体部は石棺を埋葬施設とする。これら主体部の主軸方向は、1号墳から4号墳へと続く尾根の主軸にはほぼ平行する。

出土遺物(第16図、写真図版12) 墳丘上から須恵器壺蓋(10)、須恵器壺身(11)が、溝埋土から須恵器壺



第15図 4号墳墳丘断面

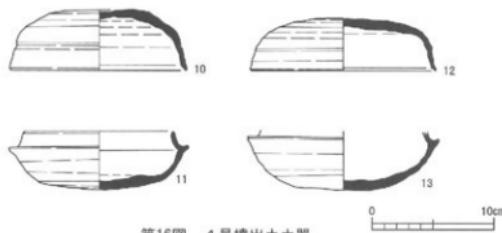
蓋(12)、須恵器坏身(13)が出土した。坏蓋(10)、(12)はいずれも天井部外面に回転ヘラ削りを行い、肩部に凹線を施す。口縁端部内面に段を持つが、(10)は明瞭さに欠ける。坏身(11)は底部に回転ヘラ削りを行う。(13)は底部に回転ヘラ削りを行った後、さらに不定方向のヘラ削りを施し成形する。

時期 出土土器から判断して6世紀中頃と考えられる。

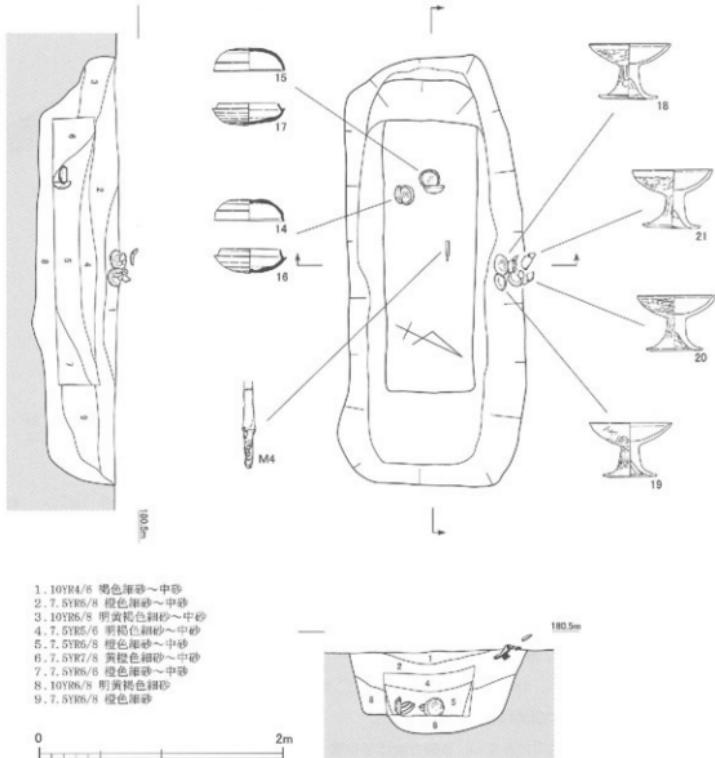
2. 第1主体部(第17図、写真図版5・6)

検出状況 墳丘中央から、やや南東の位置で検出した。現表土除去後すぐ、墓壙上に置かれた土器高塙が出土し、その周囲に墓壙の平面形を検出した。

墓壙 平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向は3号墳へと伸びる尾根の主軸とほぼ平行する。検出した規模は、主軸方向で3.5m、その直交方向で1.35m、中央部で検出面からの深さ66cmを測る。墓壙両側は2段に掘られ、墓壙の横断面は極めて複雑である。主軸方向では墓壙底部のレベルは水平である。棺底部と墓壙底部の高さが一致しないため、棺設置前に整地が行われたと考えられる。



第16図 4号墳出土土器



第17図 4号墳第1主体部

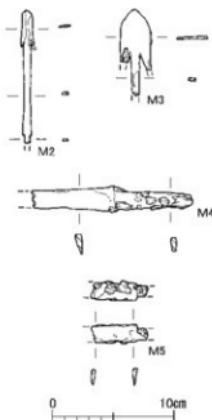
供獻土器 墓壙上面の北側で、土師器高坏4点(18~21)が、坏部を棺側へ倒した状態で出土した。高坏は墓壙の陥没によって倒れており、本来は4点がまとまって立てられていたと考えられる。

木棺 検出した木棺は長さ2.2m、幅75cm、棺中央部で深さ40cmを測る。棺の横断面は箱形を呈する。棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。棺底部には須恵器坏(14~17)がセットで2組置かれ、棺中央北側には刀子1点(M4)が刃先を西にして置かれている。坏のセットが置かれていた位置のほぼ真上、棺内埋土5層上面、4層との境から鉄鏃(M2)、刀子(M5)が出土している。出土状況から、これら2点は木棺の上に置かれていた可能性が考えられる。このように遺物の出土は棺西侧に集中する。(M3)は棺内埋土からの出土であるが、出土位置は不明である。

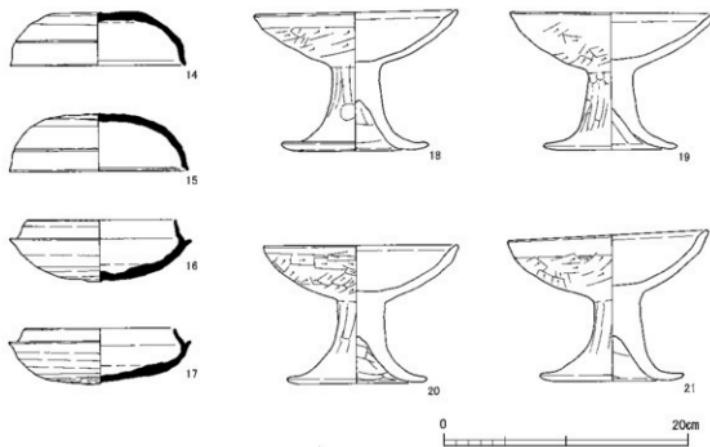
出土遺物(第18~19図、写真図版12・13) 墓壙上面から土師器高坏(18)、(19)、(20)、(21)、木棺内から須恵器坏蓋(14)、(15)、坏身(16)、(17)、鉄鏃(M2)、(M3)、刀子(M4)、(M5)が出土した。高坏はいずれも、坏部外面にヘラ削りを施し、内面は横ナデで仕上げる。脚部外面は縱方向、内面は横方

向のヘラナデを行う。高坏口縁端部には4点とも坏部の外面に黒斑がある。さらに、(18)、(19)、(20)には脚底部に坏部と対面する位置に黒斑がある。須恵器坏蓋はいずれも天井部外面に回転ヘラ削りを行い、肩部に凹線を施す。坏身はいずれも底部に回転ヘラ削りを施す。(M2)は長頭鎌で残存する長さ10.8cm、保存処理後の重さ4.4g。鎌身部の断面はレンズ形、茎部がわずかに残る。(M3)は類柳葉系の脇抜三角形鎌であり、刃部は先端に向かい薄くなる。逆剥部には木質が付着する。残存する長さ7cm、最大幅2.5cm、保存処理後の重さ6.4gを測る。(M4)は茎に木質が残る。刃先が欠損しており、残存長13.2cmを測る。(M5)は刀子の茎から身にかけての部分である。残存する長さ4.6cm、最大幅1.6cmを測る。刀子表面には木質が部分的に残る。断面は鋭角三角形である。

時期 出土土器から判断して6世紀中頃と考えられる。



第18図 第1主体部出土鉄器

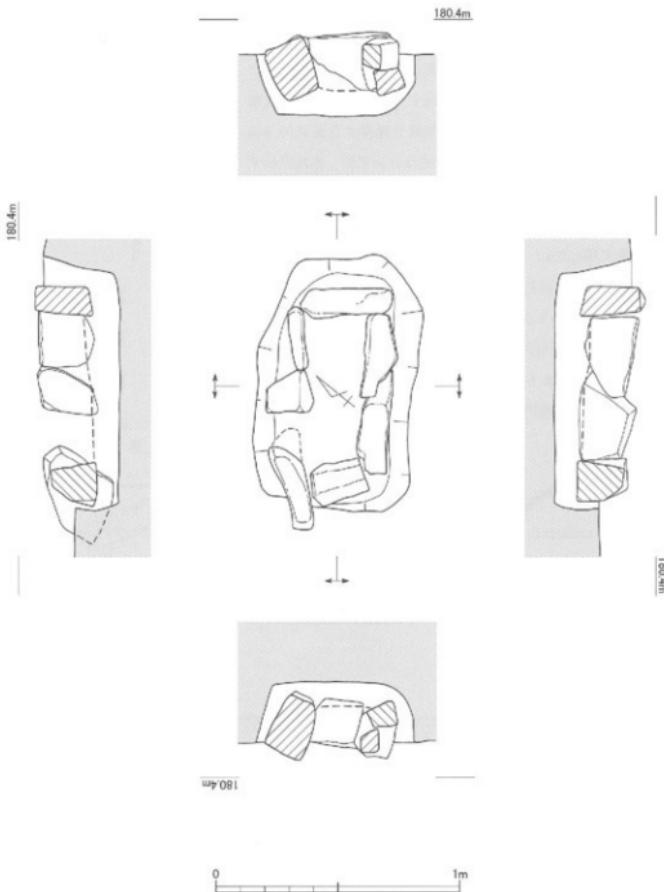


第19図 第1主体部出土土器

3. 第2主体部(第20図、写真図版6)

検出状況 石棺は調査前にすでに露呈しており、北側の長側石1石が原位置から南西方向へずれている。古くから棺の蓋が失われていたため、棺内埋土は固くしまっている。

墓壙 平面形は石棺に沿った形をする。主軸方向は3号墳へと伸びる尾根の主軸とほぼ平行しているが、第1主体部の主軸とは14.5°北側へずれがある。検出した規模は、主軸方向で1.02m、その直交方向で63cm、中央部で検出面からの深さ32cmを測る。



第20図 4号墳第2主体部

石棺 組合式箱式石棺である。検出時に蓋石は失われていた。小口石底部における主軸方向の長さは60cmを測り、原位置にある東小口の幅は25cmである。長側石は北側が3石、南側は2石からなり、いずれも1段である。石の組み合わせ方として、東小口石は長側石を塞ぎ、西小口石は長側石に挟まれる作りとなる。ここから復元した西小口の幅は20cmとなり、25cmの東小口より狭くなる。

出土遺物 棺内から遺物の出土はなかった。

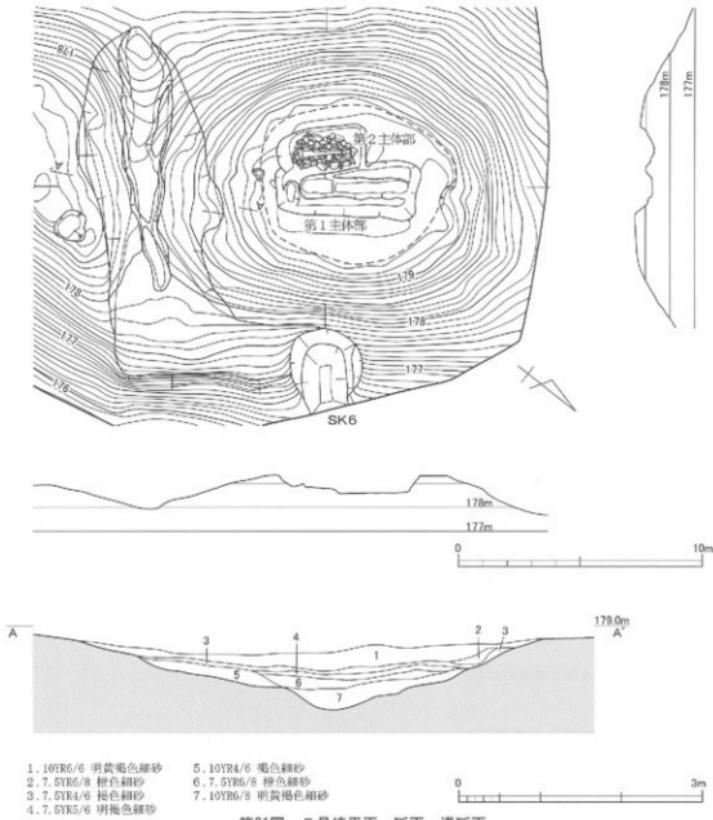
時期 年代は不明である。

第6節 5号墳

1. 墳丘(第21図、写真図版7)

検出状況 4号墳の北側、調査区内の尾根最深部にあたる標高179.3mの地点に位置する。調査区外から南西方向へと伸びてきた尾根は、5号墳で南南西方向へ向きを変え4号墳へと続く。調査前から墳丘の高まり、区画溝の産みが確認できた場所である。墳丘は自然地形を利用し、区画溝の掘削と地山の削り出しによって形成されている。墳丘東側には幅2mの平坦面が区画溝から墳丘沿いにSK6まで続いている。この区画溝から続く平坦面は墳丘をL字に開む。このことから墳形は方形を意識していると考えられる。

区画溝 墳丘の南側、尾根筋と直交方向に直線的に掘られている。稜線上で幅約5m、検出面からの深さ70cmを測る。溝の傾斜角度は墳丘側で約20°、4号墳側では10°～30°前後の傾斜となる。溝埋土7



第21図 5号墳平面・断面・溝断面

層部分は区画溝掘削後にえぐれた部分と考えられるため、5層、6層の下面が本来の溝底部であろう。溝の平面形は中央部がふくらんだ紡錘形になる。これは、墳丘南面を平面的に成形したためである。

規模 区画溝、平坦面以外では墳丘の掘が明確でないため墳丘の規模は不明である。仮に、区画溝底部である標高178mラインを墳丘標とすると、墳丘の規模は主体部主軸方向10m、その直交方向14m、高さ1.3mとなる。検出した墳頂の平坦面は、主体部主軸方向で8m、その直交方向で6.5mを測る。

埋葬施設 平坦面で2基の埋葬施設を検出した。第1主体部は木棺、第2主体部は石棺を埋葬施設とする。これら主体部の主軸方向は5号墳へと続いてきた尾根の主軸方向と平行である。

出土遺物(第22・29図、写真図版13) 墳丘の表土内から刀子(M8)が出土した。(M8)は片闊で長さ12.8cm、最大幅2.6cmを測る。刃先を少し欠くがほぼ完形で出土した。また、墳丘上ではないが、SK6埋土上面から高杯(22)、(23)が出土している。この高杯は5号墳に関連する遺物である可能性が高い。

時期 出土遺物や墳丘の形態などから、4世紀末から5世紀初頭と考えられる。

2. 第1主体部(第23図、写真図版8)

検出状況 墳頂部中央に位置し、現表土除去後すぐに墓壙の平面形を検出した。

墓壙 不整形な隅丸長方形を呈し、主軸は尾根と平行する。主軸方向で5.58m、その直交方向で最大2.22m、墓壙中央で検出面からの深さ90cmを測る。墓壙中央の長さ3m、幅1.5mほどの部分が深さ30cmほどさらに深く掘られており、2段墓壙となる。2段目の横断面は極ゆるい弧状を呈する。主軸方向では底部のレベルは水平である。墓壙北側の両隣に小さな平坦面を1段ずつ検出した。これは、墓壙内への足掛けと考えられる。墓壙内南側に長径1.1m、短径54cmの楕円形を呈する土坑を検出したが、遺物の出土はなかった。埋土横断面において、墓壙を埋め戻した後に幅6cm程の棒状のものを40cm以上突き刺した痕跡を検出した。

木棺 木棺の痕跡を発見することができなかつたため、棺の規模は不明である。

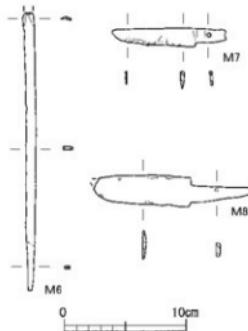
出土遺物(第22図、写真図版13) 墓壙内2段目の肩から鉈(M6)と、墓壙埋土中より刀子(M7)が出土した。(M6)は長さ22.6cm、最大幅0.9cmを測る。先端部を欠くが、それ以外の部分は良好に残存している。(M7)はほぼ完全な形で出土した。長さ9.25cm、最大幅1.6cmを測り、茎部分2.5cm、身部分6.75cm、茎には直径2mmの目釘孔がある。刃先部分の厚さが1mm程度であり、良く使用されたと考えられる。

時期 5世紀前半までと考えられる。

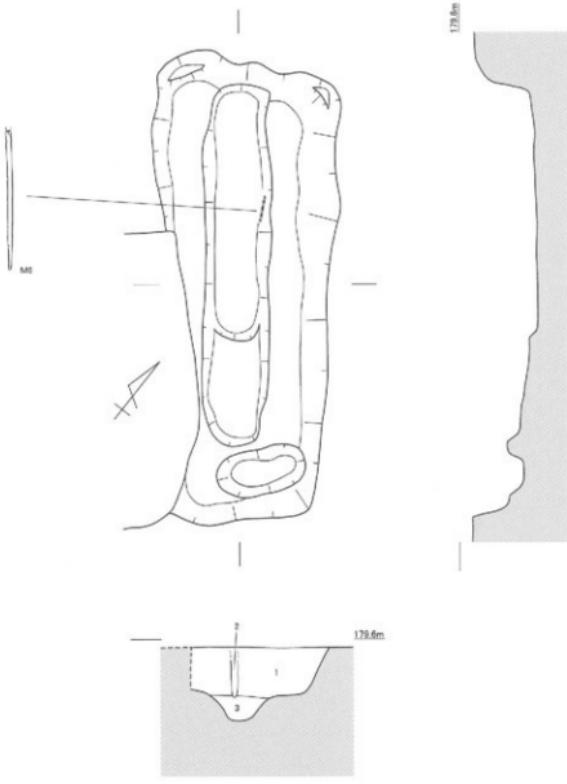
3. 第2主体部(第24図、写真図版9)

検出状況 第1主体部の検出時に発見した。第1主体部を避けて築かれている。

墓壙 隅丸長方形を呈し、主軸は尾根および第1主体部主軸と平行する。主軸方向3.64m、その直交方向で1.78m、墓壙中央で検出面からの深さ58cmを測る。



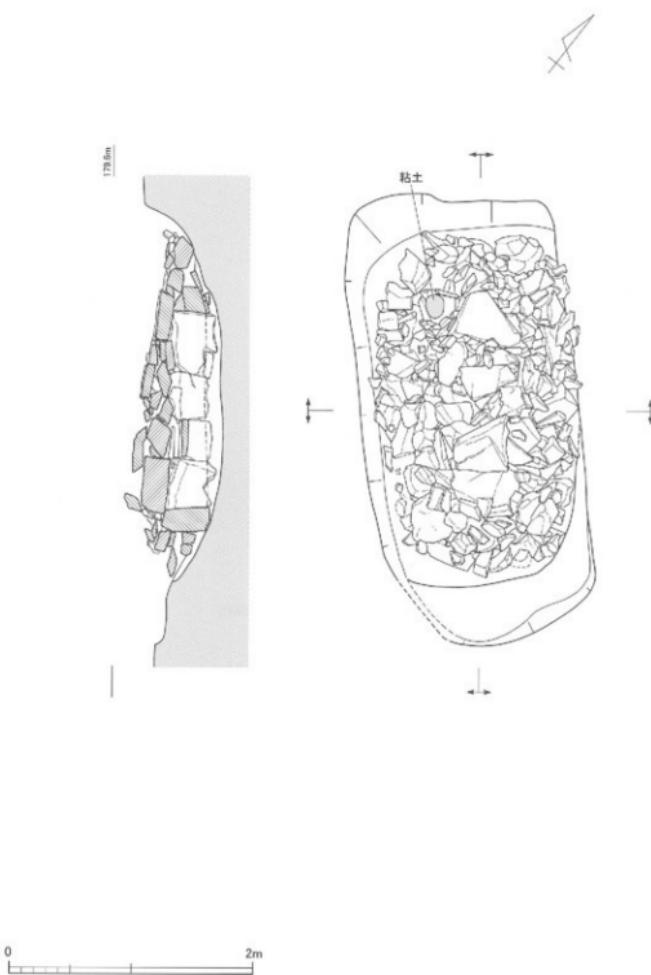
第22図 5号墳出土鐵器



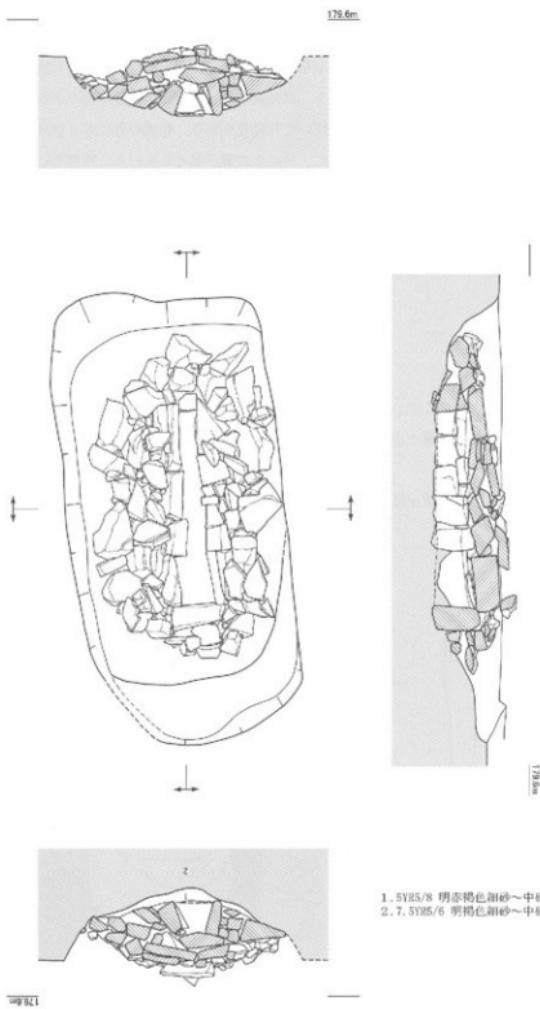
- 1, 7. 5TR6/8 橙色細砂～中砂
 2, 7. 5TR6/8 橙色細砂～中砂
 3. 5TR6/8 橙色細砂～中砂



第23図 5号墳第1主体部



第24図 5号墳第2主体部



1. 5Y25/8 明赤褐色細砂～中砂 やや粘質
2. 7. 5Y25/6 明褐色細砂～中砂

第24図 5号墳第2主体部

小豎穴式石室 石室は組合式の箱式石棺の壁体上に大きめの蓋石を置き、その周囲および上面の一部に剝石を積み上げて構築する。棺の周囲にも剝石を充填し、上面観が堅穴式石室と似たものになる。積み石の隙間から粘土を検出したが、極少量であるため人為的なものかどうかは不明である。

石棺の小口石底部における主軸方向の長さは1.57cmを測り、南小口底の幅は40cm、北小口底の幅は25cmである。長側石は、西側で4石、東側で6石を使う。東側長側石では部分的に2段積みとなる。棺の横断面は台形を呈するが、棺構築後に側石が内側に傾いた可能性もある。墓壙の底に厚さ10cmほど土を敷き、石棺が据えられる。棺内埋土から緑色をした粘土状の土の塊が出土している。埋葬時に棺内へまいった可能性がある。棺に硯床はなく、棺底の土は地山や埋土よりやや赤みがかっていた。

出土遺物 棺内から遺物の出土はなかった。

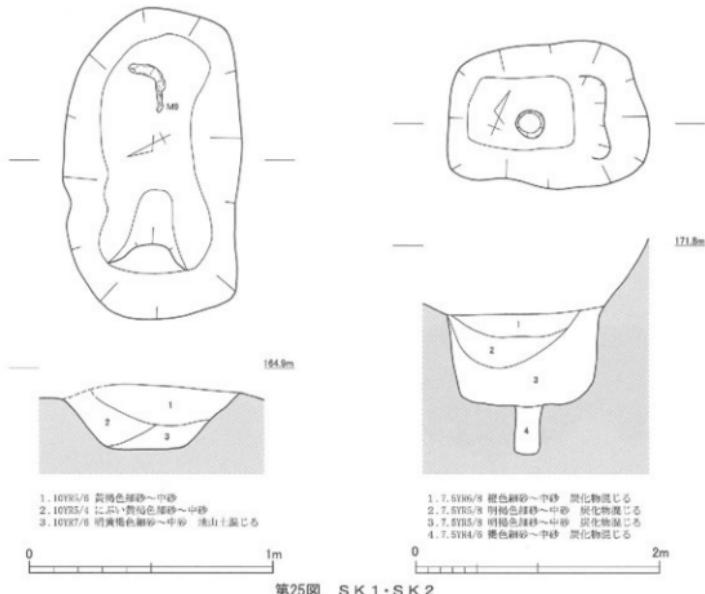
時期 5世紀前半までと考えられる。

第7節 土坑

S K 1 (第25図、写真図版10)

検出状況 2号墳の区画溝内で検出した。標高164.5mの地点に位置する。土坑は区画溝埋土を切って掘られている。土坑底部東側から鉄鏹1点が出土した。土坑埋土の堆積状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。

形態規模 長径1.27m、短径72cm、検出面からの深さ25cmの不整形な椭円形を呈す。土坑西側に若干浅



第25図 SK 1・SK 2

い部分があるが、土坑の底部はほぼ水平である。

出土遺物(第29図、写真団版13) 鉄鎌(M 9)が出土した。

(M 9)は刃の先端を欠くが、それ以外はほぼ完形で出土した。

長さ26.2cm、刃の最大幅3.4cm、厚さ3mmを測る。柄部の先端を折り曲げて若柄に備えている。

時期 12世紀～13世紀と考えられる。

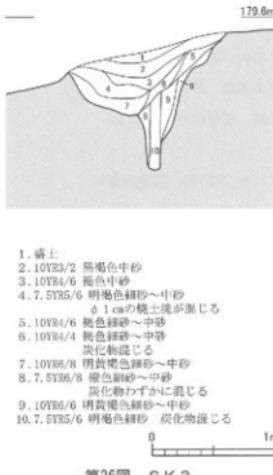
S K 2 (第25図、写真団版10)

検出状況 3号墳の西側、標高171.5mの地点に位置する。

形態規模 長辺1.6m、短辺1.2mの長方形を呈す。土坑底に杭のようなものを立てた小穴を持つ。土坑底部は平坦であり、小穴までの検出面からの深さは75cmを測る。小穴は直径20cm、深さ38cm。

出土遺物 遺物の出土はない。

時期 時期は不明である。



第26図 SK 3

S K 3 (第26図、写真団版10)

検出状況 4号墳の北側、標高179mの地点に位置する。

形態規模 直径1.3mの円形を呈す。土坑底に杭のようなものを立てた小穴を持つ。小穴までの検出面からの深さは40cmを測る。小穴は直径10cm前後、深さ60cm。断面観察から、小穴埋没後に再び掘削が行われていたことが確認できる。

出土遺物 遺物の出土はない。

時期 時期は不明である。

S K 4 (第27図、写真団版10)

検出状況 5号墳区画溝の南側、標高178.8mの地点に位置する。



第27図 SK 4・SK 5

形態規模 長径1.45m、短径1mの梢円形を呈し、検出面からの深さ21mを測る。埋土には焼土や炭化物が多く含まれ、内面が赤く焼ける。

出土遺物 遺物の出土はない。

時期 時期は不明である。

S K 5 (第27図、写真図版10)

検出状況 5号墳区画溝の南側、標高178.8mの地点に位置する。

形態規模 長径1.35m、短径85cmの梢円形を呈し、検出面からの深さ30cmを測る。埋土には焼土や炭化物が多く含まれ、内面が赤く焼ける。

出土遺物 遺物の出土はない。

時期 時期は不明である。

S K 6 (第28図、写真図版10)

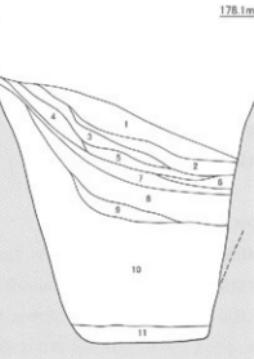
検出状況 5号墳の東側、調査区の境に検出した。土坑は調査区外東へとさらに伸びる。

形態規模 検出できた範囲は長径3.3m、短径2.9mの梢円形を呈する。検出面からの深さは3mを測り、今回検出

した土坑の中で最も深い。上部は漏斗上、下部は垂直に掘削されている。底部は、平坦で、平面形は長方形である。

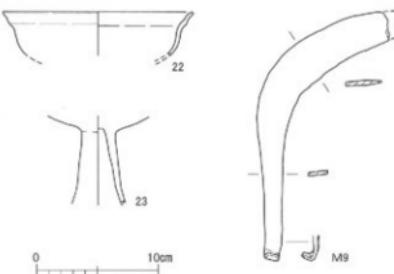
出土遺物 (第29図) 土坑埋土上面より高环(22)、(23)が出土した。(22)は口縁部の破片である。口縁端部を外反させる。(23)は脚部破片である。摩滅が激しく調整は不明である。これら2点は、出土状況から5号墳から転落した遺物の可能性が高い。

時期 時期は不明である。



- 1, 7.5YR6/8 橙色細砂
- 2, 7.5YR6/6 刈穀色細砂～中砂
- 3, 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～中砂
- 4, 7.5YR4/6 暗褐色細砂～中砂
- 5, 10YR3/2 黒褐色細砂～中砂 炭化物多く混じる
- 6, 10YR3/3 にぶい黄褐色細砂～中砂 地山風化土混じる
- 7, 5YR6/8 棕色細砂～中砂
- 8, 7.5YR6/8 棕色砂質土
- 9, 7.5YR6/8 棕色砂質土
- 10, 5YR5/8 明赤褐色砂質土 おずかに炭化物混じる
- 11, 7.5YR5/8 明褐色粗砂～細砂

第28図 S K 6



第29図 土坑出土遺物

第4章 総 括

(1) 出土遺物について

土器

方谷古墳群から出土した遺物はごくわずかであり、出土のない古墳もある。そのなかで2号墳、3号墳、4号墳からは時期的考察を行える須恵器、土師器が出土した。これら遺物について考察を行う。

須恵器は2号墳、3号墳、4号墳から出土している。2号墳出土の須恵器(2)は古墳築造時期とは関係のない中世の須恵器碗底部であり、12世紀から13世紀のものと考えられる。3号墳の(5～7)、4号墳第1主体部出土の須恵器(14～17)はいずれも周辺縄年ににおけるMT10型式に平行すると考えられる。また、4号墳第1主体部上から出土した土師器高杯は供食器と考えられるため、主体部出土の須恵器とほぼ同じ時期といえる。2号墳から出土した土師器皿(3)、(4)は制作手法から京都系の土師器と考えられる。同じ周溝から出土した須恵器碗底部と同様12世紀～13世紀頃といえる。

鉄製品

今回の調査で出土した鉄製品は、刀子、鐵鎌、鉋、鐵鍊である。その中で古墳の主体部から出土したものは刀子(M1)、(M4)、(M5)、鐵鎌(M2)、(M3)、鉋(M6)である。

刀子は2号墳主体部から(M1)、4号墳第1主体部から(M4)、(M5)、5号墳第1主体部から(M7)が出土している。(M1)、(M4)、(M5)は両闇、(M7)は片闇の刀子である。刀子を分類した魚津和克氏によれば、古墳時代中期(5世紀)までは片闇が中心であり、中期末(5世紀末)以降に両闇となる傾向が指摘されている。⁽¹⁾ 両闇の刀子のうち(M4)、(M5)はMT10型式の須恵器(14～17)、鐵鎌(M2)、(M3)と同じ棺内から出土している。鐵鎌は杉山秀宏氏の行った分類によると、(M2)が長頭鎌B形式第V形式、(M3)が脛抉三角形鎌A形式A類にあてはまる。⁽²⁾ 須恵器、鐵鎌はいずれも6世紀中頃の遺物である。このことから(M4)、(M5)の時期は共伴する遺物と同じ6世紀中頃と考えられる。2号墳出土の(M1)、5号墳出土の(M7)は時期的決定に確実性を欠くが、(M1)は両闇である点から5世紀末以降、(M7)は古墳主体部の小堅穴式石室の年代やSK6出土の土師器などから4世紀末から5世紀初頭ごろのものと考えられる。

山東町に隣接する朝来市梅田古墳群では5世紀前半頃から5世紀後半(須恵器TK208型式)の間に刀子が片闇から両闇へ移行している。そして、古墳時代中期末以降に全長15cmを超える大型の刀子が出現する傾向があると指摘する。⁽³⁾ 方谷古墳群でも、4世紀末から5世紀初頭の5号墳から片闇の刀子、6世紀中頃の4号墳からは両闇の刀子が出土している。また、4号墳出土の(M4)は残存長13.2cmであるため、本来は15cm以上の大型品であったと考えられる。このことから方谷古墳群でも梅田古墳群と同様に古墳時代中期以降に刀子が大型化する傾向が認められる。

SK1から出土した鐵鎌(M9)は柄部の先端を折り曲げる特徴のある形をしている。このような鐵鎌は、兵庫県内では小野市南山古墳群土坑3から出土している。⁽⁴⁾ この鎌は共伴する土師器から12世紀代と考えられている。(M9)と同じ周溝内から出土した土師器皿は12世紀末と考えられるため、(M9)も12世紀から13世紀代と考えられる。SK1は埋没した周溝に作られた土坑である。このことから2号墳の周溝は12世紀代には埋没していたといえる。

施（M 6）は形態的特徴から時期を特定することは難しいが、出土した 5 号墳の特徴から 4 世紀末から 5 世紀初頭ごろと考えられる。

（2）5 号墳第 2 主体部について

5 号墳第 2 主体部は箱式石棺の上面に石を積み上げる構造を持つ。このような石棺の分類を行った福永伸哉氏はこれらの石室を小堅穴式石室と呼称し、その定義を「内法全長が 3m 未満、壁体のすべてまたは一部が 2 段以上の積み石で構成されているもの」としている。そして小堅穴式石室は石積み小堅穴式石室と石棺系堅穴式石室の 2 タイプに分けられ、石棺系堅穴式石室はさらに a 型から d 型の 4 種類に細別できるとしている。^① この分類に従うと、5 号墳第 2 主体部は石棺系堅穴式石室 b 型に当たる。

方谷古墳群の近隣において小堅穴式石室は山東町柿坪中山古墳群 2 号墳、1 A 号墳、3 号墳や、和田山町梅田古墳群 16 号分などで確認されている。これら古墳の時期は出土遺物などからいずれも 4 世紀から 5 世紀初頭の間に位置づけられる。これら古墳と方谷古墳群 5 号墳では、直線的な区画溝、地山成形による方形形状の墳丘など共通する点も多い。また、5 号墳第 1 主体部では刀子と箒が副葬されており、但馬地域の伝統的な小規模古墳の特徴を示している。第 2 主体部は第 1 主体部を越えるように築かれている点などから、2 つの主体部はそれほど時差があるとは考えられない。このことから 5 号墳は 4 世紀末から 5 世紀初頭の但馬の伝統的な墓制を踏襲した古墳ということができる。

（3）方谷古墳群について

方谷古墳群は 2 ~ 4 号墳が 6 世紀中頃、5 号墳は 4 世紀末から 5 世紀初頭に築造時期が推定できた。1 号墳からは時期の決め手となる遺物が出土していないが、墳丘の築造方法などから 2 ~ 4 号墳に近い時期が想定できる。これら各古墳から導き出される特徴から古墳は 2 グループに分けられる。ひとつは 5 号墳で見られる方形形状の墳丘、箒や刀子を副葬するなど但馬地域の伝統的な墓制を踏襲した古墳。もうひとつは 1 号墳 ~ 4 号墳で見られる円形を意識した墳丘、須恵器や新しい特徴を持った刀子の副葬など 5 号墳とは異なる様相を示す古墳である。これらの特徴の違いは古墳が築かれた時期差によるものである。

但馬地域では弥生時代以来「一墳丘多埋葬」を特徴とする墓制が普遍的に認められる。方谷古墳群周辺では、和田山町東梅田古墳群、山東町柿坪中山古墳群などがこれにあたる。それが、5 世紀半ばから 6 世紀初頭には、山東町森向山古墳などで見られるように、「一墳丘一埋葬」へと墓制が変化する。その後、6 世紀末ごろからの本格的な横穴式石室の導入により、再び「一墳丘多埋葬」が認められるようになる。方谷古墳群では、5 号墳が弥生時代以来の「一墳丘多埋葬」を引き継いだ古墳であるといえる。

一方、1 ~ 4 号墳は小型の石棺を第 2 主体として持つものもあるが、基本的には「一墳丘一埋葬」といえる。6 世紀中頃は、時期的に横穴式石室導入期にあたるが、1 ~ 4 号墳は「一墳丘多埋葬」といえる状況ではない。これら 1 ~ 4 号墳を築いた集団は、新しい墓制を見据えつつも、それまでの伝統的な墓制を維持していた集団であったのであろう。

（註）

1. 魚津和寛「鉄製農耕具副葬についての試論：『表象としての鉄器副葬』」『鉄器文化研究会』2000
2. 杉山秀宏「古墳時代の鉄鍛について」『福岡考古学研究所論集』8
3. 『梅山古墳群Ⅰ』兵庫県教育委員会 2002
『梅山古墳群Ⅱ』兵庫県教育委員会 2003
4. 『津谷遺跡 南山古墳群 玉津山中道跡南大山地点』兵庫県教育委員会 1993
5. 福永伸哉「近畿地方の小堅穴式石室」『兵法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査同 1992

写真図版

写真図版 1



古墳群調査前全景（北から）



古墳群調査後全景（北から）



古墳群調査前近景
(西から)



古墳全景
(南東から)

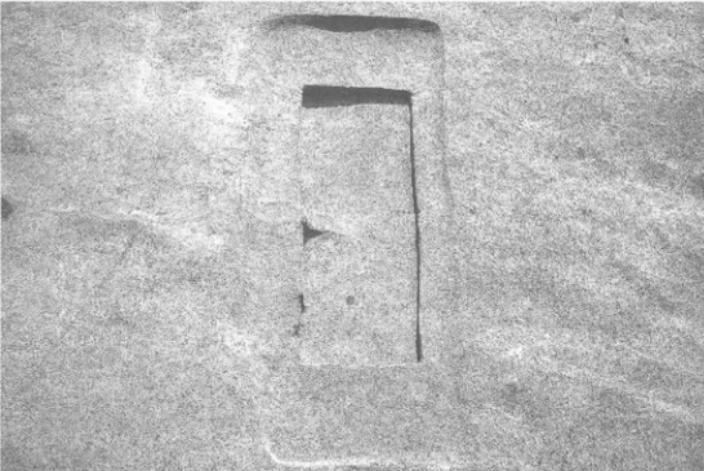


第2主体部
(北西から)

写真図版3 2号墳



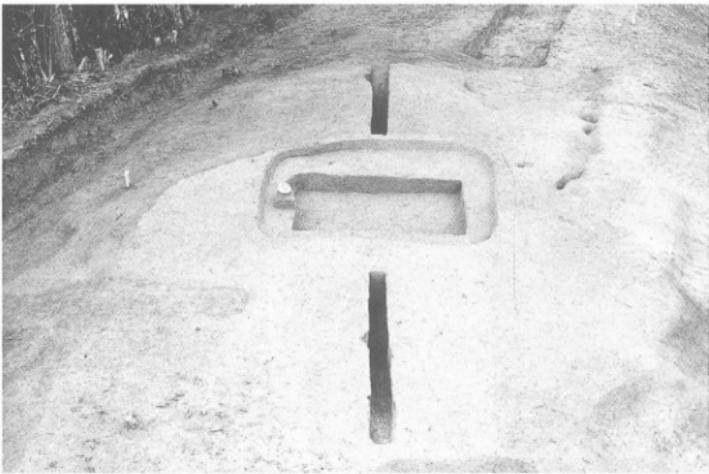
古墳全景
(南東から)



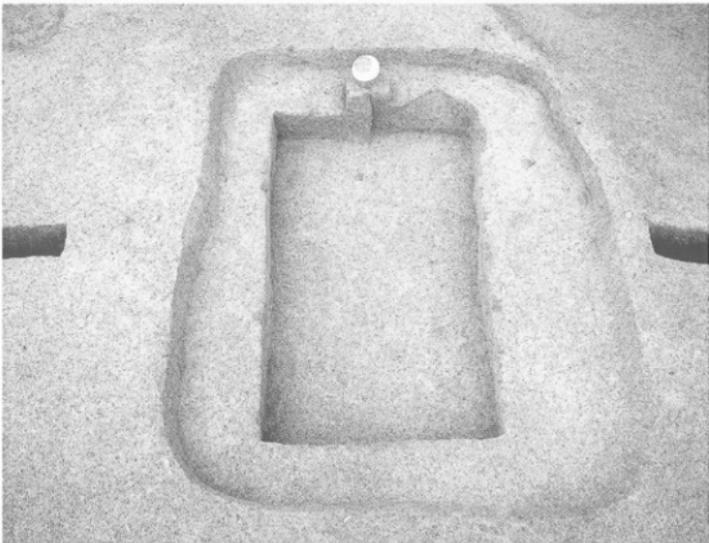
主体部
(南西から)



貼り石
(北西から)



古墳全景
(東から)



主体部
(北から)

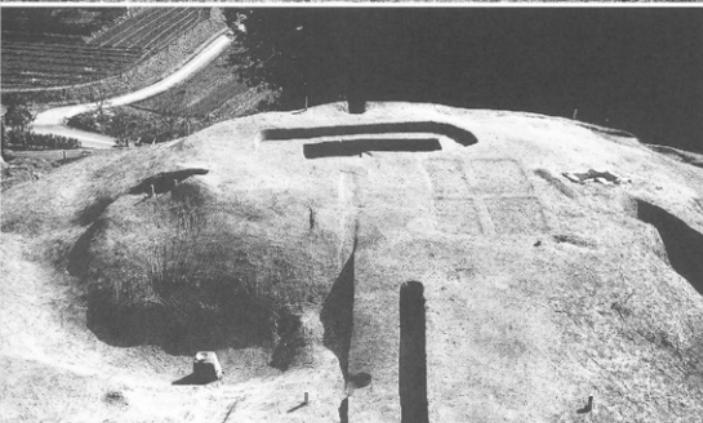


主体部遺物出土状況
(南から)

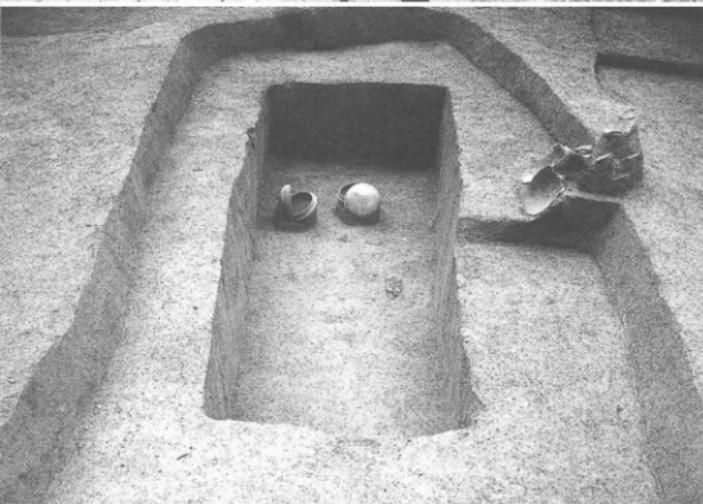
写真図版5 4号墳



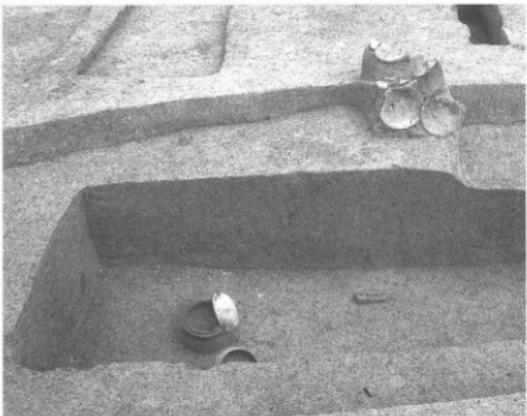
古墳調査前全景
(北から)



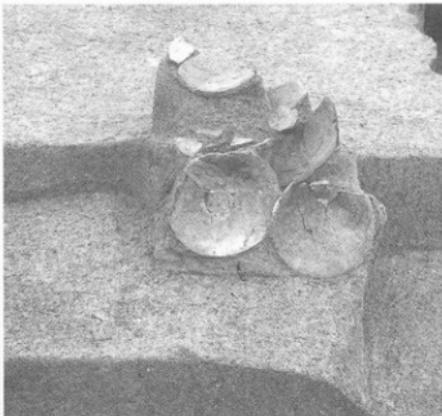
古墳全景
(北から)



第1主体部
(北東から)



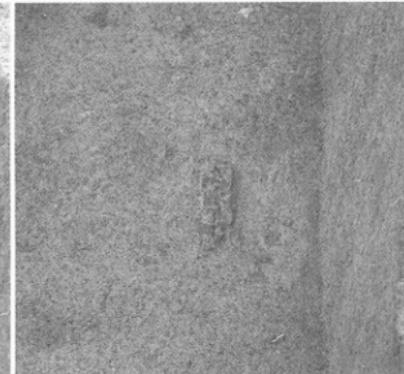
第1主体部遺物出土状況（南から）



第1主体部高部出土状況（南から）



第1主体部須恵器片出土状況(北東から)



第1主体部刀子出土状況(北東から)



第2主体部（南西から）



周溝断面、遺物出土状況（北西から）

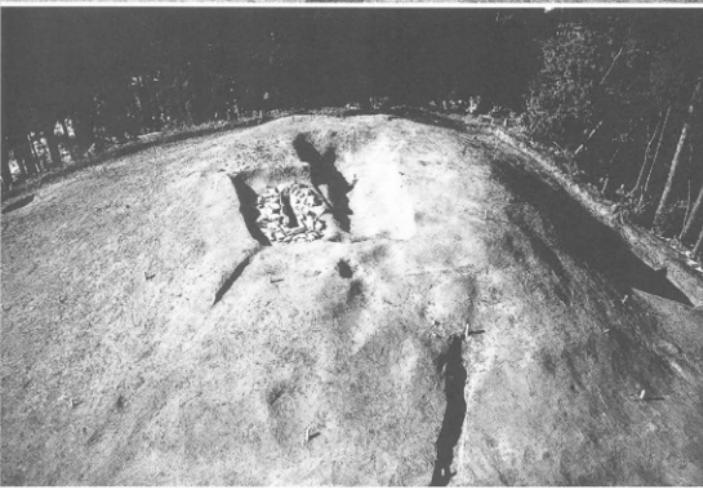
写真図版7 5号墳



古墳調査前全景
(南東から)



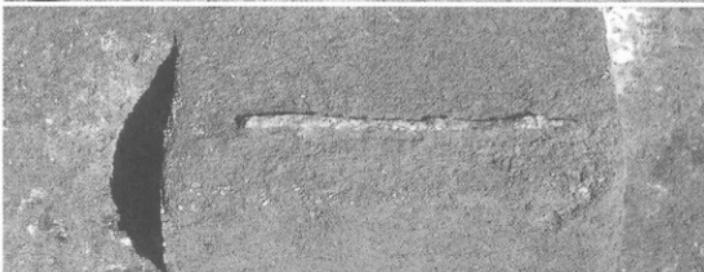
古墳全景
(南東から)



墳頂部全景
(南東から)



第1主体部、第2主体部近景
(南東から)



第1主体部鉄器出土状況
(南西から)



第1主体部全景
(南東から)

写真図版9 5号墳第2主体部



主体部検出状況（北西から）



主体部検出状況（南西から）



蓋石検出状況（北西から）



蓋石検出状況（南西から）



蓋石除去状況（北西から）



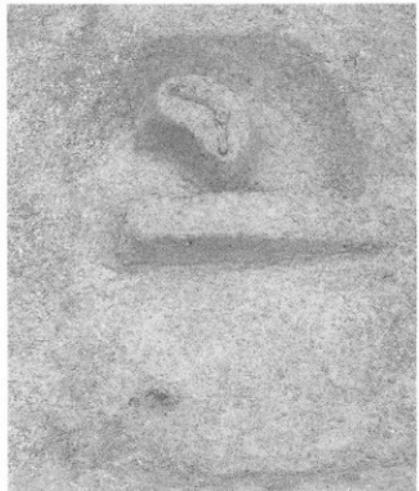
蓋石除去状況（南西から）



石棺検出状況（北西から）



石棺検出状況（南西から）



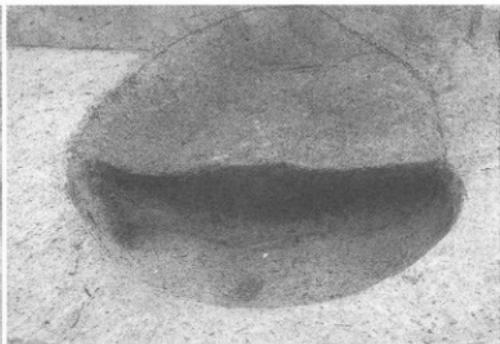
SK 1 (北西から)



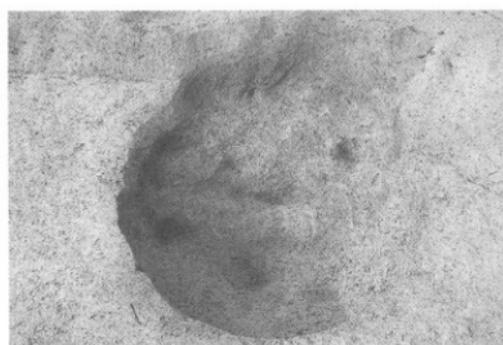
SK 2 (東から)



SK 3 (西から)



SK 4 (東から)



SK 5 (東から)



SK 6 (南東から)

写真図版11

2号墳



1



3



2



4



M1

3号墳



5



6



7



8



9

4号墳



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19

写真図版13

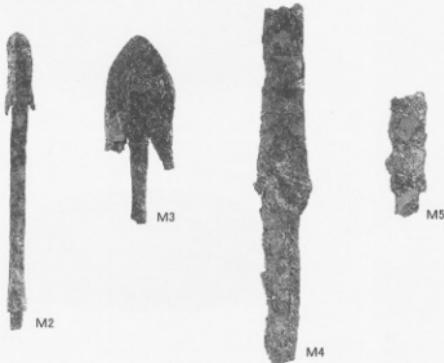
4号墳



20



21



5号墳



SK 1



M9

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第330号

朝来市山東町

方谷古墳群

一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅱ)建設に伴う発掘調査報告書一

2008年3月4日 発行

編集 兵庫県立考古博物館
〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 500
TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会
〒 650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目 10-1
TEL 078-341-7711

印刷 (株)岸本印刷所
〒 676-0806 高砂市米田町米田 400-1
TEL 079-432-0123
